

ピエール・デュリ Pierre DURIX

シャロレ・ブリオネ地方文化財国際研究センター・所長
Centre international d'Etude des Patrimoines culturels en Charolais-Brionnais

シャロレ・ブリオネ地方文化財国際研究センター CEP (Centre international d'Etude des Patrimoines culturels en Charolais-Brionnais) を立ち上げ、現在所長。

CEP は、フランス・ブルゴーニュ地方南部シャロレ・ブリオネ地方の中世建築に関するほとんど全ての資料を網羅的に収集し、他国の研究グループとも連携して調査・研究を行う民間の文化財保護団体である。研究者支援はもとより、この地方にあるロマネスク建築を広く一般に紹介する活発な活動は、近年国際的にも認められている。

アルノー・タンベール Arnaud TIMBERT

フランス・リール第三大学シャルル・ド・ゴール校・准教授
Université Charles-de-Gaulle - Lille 3

美術史、考古学、建築史を横断する「モノ」に即した新しい研究手法である「建築考古学 (Archéologie du bâti)」をゴシック建築研究において実践する、今もつとも活躍する気鋭のフランス若手研究家の一人。とりわけ、今まで知られていなかった、ゴシック建築における鉄や鉛などの金属の使用や建設技術の実態について、これまでの見方をくつがえすような新しい発見の数々で、学会に新風を吹き込んでいる。

著者 アルノー・タンベール『ヴェズレー・マドレーヌ寺院の会堂頭部とブルゴーニュ地方の初期ゴシック建築について』レンヌ大学出版会、2009年

清水 重敦 Shigeatsu SHIMIZU

奈良文化財研究所文化遺産部・景観研究室長
Nara National Research Institute for Cultural Properties

文化遺産を今に活かす実践と、都市・建築史の研究を常に往復しながら、日本における建築史学の社会的役割に一石を投じ続けている。法隆寺から町家まで、建築単体から文化的景観まで、復原・再現から重層的継承まで、時代、類型、方法を横断して成果を世に問う。

著者 清水重敦『擬洋風建築』至文堂、2003年、『復元思想の社会史』(共著)、建築資料研究社、2006年等

